



## 複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム

＜日本古代学教育・研究センター＞明治大学大学院文学研究科史学専攻・日本文学専攻

ニューズレター 第21号

### ◆ 巻頭言

明治大学文学部長・総括責任者 石川日出志

#### 先端を切り開く大学院生

理系では20～30代前半が研究の最先端を切り開くと言われるが、理系だけではないと体感したことがある。

大学2年生の秋から4年生の春まで（1975～77年）、毎週2・3日、王子警察署隣のビルの1室に通った。1974年度に行われた千葉県東金市山田水呑遺跡の発掘調査成果を報告書として取りまとめる作業に従事するためである。私自身はこの遺跡の発掘調査には行かなかったが、参加した同級生に誘われて整理作業に加わることになった。発掘調査も整理作業も、大学院生（修士）クラスが主導していた。当時私は、旧石器～縄文時代にもっとも関心があったものの、卒業後、郷里に戻って生涯考古学を続けるには、中世までの考古学の基本をマスターしなければならないと思っており、奈良・平安時代の大規模な集落遺跡の調査報告書を作成する作業は格好の機会に思えた。

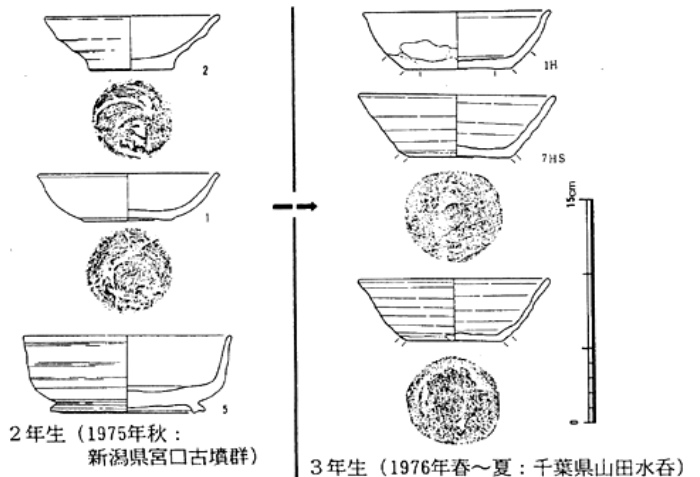
高校2年生の折に考古学の世界に魅了され、土器や石器の細かな特徴を観察することには慣れ、実測の方法も大学1年次に独力で獲得した

つもりでいた。しかし、初日に古代の土器の観察と実測の手ほどきを受けて、自分の力が無に等しいことを痛感させられた。須恵器（古墳時代～古代の窯で焼かれた土器）の研究を専門とする金子さんから、土器の形を観察するのではなく、土器をつくる技術の子細を観察し、それを第三者に伝える手段が実測であり実測図なのだ教えられた。また、学部時代に縄文土器の編年研究の方法論で駿台史学会賞を受賞した松村さんは、8～9世紀の2世紀に互る約1500点もの古代土器群を型式分類し、先行研究がほとんどないなかで、下総国域の土器編年を日々組み上げられていく。また、この土器編年をもとに古代集落の変遷を復元する研究も進められる。その同級生である石田さんは理論研究に通じており、これら院生クラスの研究実践に毎日接するのは、とても刺激的な時間であった。

こうした研究の最先端を突き進む姿に接した結果、卒業後すぐ郷里に戻る計画は、2年延長することになった。顧みれば、この整理作業への参加は、私にとっては大きな人生の転機の糸口だったことになる。

#### 目次：

大阪大学・関西大学・京都府立大学	
明治大学研究交流プログラム	2
フィールドワーク	3
中国プログラム	4
東北プログラム	4
南カリフォルニア大学プログラム	6
国際学術研究会	8
「交響する古代VII—古代文化資源の国際化とその意義 vol.2」	
プログラムの軌跡	



この時、石川の実測図が大きく変わった

## ◆大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史 大学院生研究交流プログラム

日 時：2017年1月8日（日）・9日（祝）

会 場：大阪大学豊中キャンパス

文法経済学部本館・大会議室

参加人数：教員10（5）、院生27（7）、合計37（12）名

（ ）内は明治大学人数

\*\*\*\*\*

### ◆1月8日

開会挨拶・趣旨説明 石川日出志（明治大）

ライオン・ジョセフ(大阪大) 「定角式鉄鏃の成立過程の再検討」

渡邊貴亮（関大） 「後期旧石器時代後半期における小形ナイフ形石器の様相～大阪平野出土資料を中心に～」

佐藤兼理（明治大） 「堅穴住居構造から見る弥生後期の南関東」

上田裕人（関大） 「近畿弥生集落の堅穴建物とその特性～弥生時代前期の事例を中心に～」

土井翔平（明治大） 「古墳時代前期における同工品分析の応用と展望」

小野寺洋介（明治大） 「墳丘上配置の須恵器とその儀礼系譜～土製模造品から須恵器への変遷に関して～」

### ◆1月9日

木村理（大阪大） 「5世紀後半における大規模埴輪生産の実態～百舌鳥古墳群出土埴輪の観察を中心として～」

谷口とし（明治大） 「軍防令と防人～「病」関連条文を中心に～」

里舘翔大（明治大） 「御野国戸籍の寄人の編成～「課丁数」での考察に触れて～」

内田敦士（大阪大） 「称徳朝の仏教改革」

増成一倫（大阪大） 「救急料の成立と機能」

高橋典子（明治大） 「『小右記』にみる平安貴族の怪我と病気～医師・陰陽師・僧侶の治療行為に注目して～」

閉会挨拶 福永伸哉（大阪大）



## ◇参加記

博士前期課程2年 里舘 翔大



本年度も旧石器時代～平安時代と幅広く報告された。各報告の質疑応答時間は10分と短いながらも、各大学の教員のみならず、院生からも多くの質問が寄せられ、非常に有意義な時間であった。なお、年度内に、質疑応答での意見や質問・指摘を踏まえた上で報告集が発行され、各院生の成果としてあげられる。また、一日目の懇親会の席でも、各大学の参加者と交流を深め、他分野の研究状況や考察方法を知ることができ、こちらでも有意義な時間を過ごせた。

明治大学には「複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム」があり、大阪大学・京都府立大学・関西大学との研究交流プログラムもその一環である。学会や研究会以外での大学院内プログラムで東西、他大学、さらには他分野の研究者と交流を深められるため非常に刺激的だ。文責者は本年度で二度目の参加であったが、本年度の交流において改めて他大学、他分野との交流の重要性を実感した。所属大学内のみ、もしくは自身の研究分野のみでは研究を深化させることはできない。まさに、「複眼的」な視点を持つことが重要なのであり、本プログラムはその視点を養うことができる貴重な場である。

最後に、報告場所の確保、準備、及び本年度も私たちを受け入れてくださった大阪大学の方々への謝辞をもって擱筆する。



## ◆フィールドワーク

### ◇中国プログラム

実施日 : 2016年10月27日(木)～31日(月)4泊5日

参加人数 : 学生2名 引率者4名 合計 6名

実施場所 : 中国北京(中国社会科学院世界歴史研究所)

〈中国プログラム・フィールド調査日程概要〉

10/27 羽田空港を出発、北京首都国際空港到着。

中国社会科学院歴史研究所標本室見学

10/28 中国社会科学院にて学術交流

10/29 中国国家博物館・中国国家図書館を見学

10/30 盧溝河橋・西周燕都遺址博物館・

周口店遺址博物館を見学

10/31 北京市内見学。北京首都国際空港を出発、羽田空港到着



### ◇参加記

博士課程前期2年 佐藤 正則

2016年10月27日から31日にかけて、30年ぶりの北京を訪れ、中国社会科学院世界研究所の教授及び研究員との意見交換及び歴史遺址を訪れることができた。

小生は本大学の商学部卒で会社定年退職後、史学専攻科で再度学習する機会を得て入学したものの、勝手違う分野での戸惑いの中、頭を悩ませながら日々学生生活を送っております。海外での活躍を夢み貿易界に入り、会社人生の半分以上を海外で過ごした中で、特に最初の大きな仕事は、1984～1986年にかけて中国の開放改革政策の中で北京在の工場との20億円規模の国家級生産設備導入プロジェクトに参加し、30名の中国人を日本に招聘して技術指導、及び延べ20名の日本人技術者を引き連れて、機械設備の設置・指導に従事した思い出深い北京です。

その後、北京は政治の中心地であり、産業は、天津・大連を中心とした華北地域、上海・蘇州・杭州を中心とした華東地域、深セン・広州を中心とした華南地域が主流となりそこに活動の軸足を移して行き、北京を訪れる事はなかったが、この30年間の北京の変貌には大変大きな感銘と現在見られる中国の大きな飛躍の一助となれた事に喜びを感じています。

27～28日にかけて、メインである中国社会科学院世界歴史研究所との意見交換・交流の予定が組まれていて、学術界の方々との会合はある意味初めてであったのでどういう展開となるのか興味津々であった。

発表会では、徐建新先生(明大で博士号取得されたと聞いて感激)を中心に門下生7名程参加され、日本側より、井上和人特任教授『日本列島の王宮・都城と中華帝国・朝鮮半島三国との関連性』、佐々木憲一教授『日本古墳時代の対外交渉』、石川日出志教授『日本列島の環濠集落』の発表を日本側の学生も含め、中国の研究生らは熱心に聞いていた。徐建新先生の立派な通訳で、質疑も活発に行われ、

日本の先生方の研究発表は十分に現地で理解され両国間の相互理解が高まったと感じております。

中国社会科学院世界歴史研究所は、80名の組織の中で70名の研究員が所属しており、更に定年で退いた方も加わって共同で研究している機関であり、欧米、ラテンアメリカ、アフリカ、日本と多くの国の歴史を研究しております。

大変驚いた事は、北京の人は英語に熱心であるという事で、夕食の交流会にも参加された隣の男性は英国歴史研究であるが故に流暢な英語で会話もできたし、また、窓口で中心となって受け入れ体制を整えてくれた刘健女史研究員も流暢な英語で対応して下さいました。

1980年代は日中国交回復もあり、中国人の日本語学習熱があったが、現在は、北京においては米国への留学生も多くいる中で、英語が主になっているように思える。

上海は日本語を話す人が多かった。

このような世界歴史研究所においては、世界の大半で共通語となり得る英語での意見交換の場が重要であり、日本も





世界と更なる幅広い交流を継続拡大の為、より国際化を目指す中で同様な努力は必要かと思う。

### (B) 悠久の歴史・中国

中国の歴史は5000年と言われている中で、今回訪問した場所は非常に有意義、且奥深い印象を受けた。日本はまた縄文時代で、槍と弓で野山を駆け巡っていたときに、既に、殷・周と国家を築き国の統一へと動いている中で、歴史の重みを博物館及び遺址地への訪問で切に感じた。

#### ①周口店遺址博物館

北京市郊外の房山区にある北京原人の遺址である。

市内から南西約50kmの竜骨山のふもとにあり、50万年前には北京原人、20万年前から10万年前までは新洞人、3万年前から1万年前には山頂洞人が生活していた、と言われている。現代人（ホモサピエンス）ではないが、旧人時代からの生活の場であった中国の長い歴史を彷彿させるものである。

#### ②西周燕都遺址博物館

周の中心は中原大地にあり鎬京（現在の西安）を都としていて、その時代の北京を含んだ北部にあった一国（燕）の都である。ここに少し興味があるのは、日本人のルーツと関連しているのではと思っているからである。航海技術が発達して

いなかった時代では陸路で燕から朝鮮半島を経由して来たか、或いは、その勢力に押され朝鮮半島の人達の一部が更に南下して来て、対馬を経由して渡って来たのかという点である。

#### ③中国国家博物館

上海博物館及び近郊の嘉定博物館は駐在時代に何回も訪問しているが、北京博物館は初めてである。さすがに首都の博物館であるのでその規模と内容は充実しており、とても数時間では見終われない。そんな中で長く足を止めたのが貨幣展示室であった。商社マンの性であるのか。殷・商時代の貝幣から始まり、戦国時代の刀幣と本格的な貨幣時代の始まりの歴史である。つい、銭幣の写真集と刀幣のレプリカを買ってしまった。まだ商いから足を抜けられないのかと反省感も頭を少しよぎった。日本の律令国家形成の中で、唐銭制度を導入し和同開珎（和銅元年＝708年）を鑄造・発行した。日本でも貨幣経済の始まりである。

#### ④盧溝河橋

北京の南西約15kmにある盧溝河（現在は永定河）に架かる、石造りの白いアーチ橋で全長は2665mで、11個のアーチからなる。1937年7月7日の盧溝橋事件である。

そこから両国の不幸な事件が始まった訳であるが、その後の国交回復と多くの日中合作事業で現在の両国間の発展・改善の道をたどった。

橋の手前の石畳には、数百年にわたって往来した車の轍跡が直線的に深く残っており、歴史の重みを感じる。

今回の研修プログラム参加において、過去のビジネス界での活動の中で、特に気にとめていなく見過ごしていた別の視点から中国を観察できた事に十分に意義を感じ、新たな史学研究という人生第二のステップにおいて、時の流れを遡って吟味して行きたい所存です。色々と計画の準備及び御指導頂いた先生方及び関係者に感謝申し上げます。

## ◆フィールドワーク

### ◇東日本プログラム

実施日： 2016年12月13日（火）～17日（土）

参加人数： 院生6名、引率教員3名、合計9名

実施場所： 岩手県・宮城県

<東北日本プログラム・フィールド調査日程概要>

- 12/13 岩手県立博物館、盛岡市遺跡の学びの館、国史跡志波城古代公園、矢巾町歴史民俗資料館、徳丹城跡、盛岡城跡
- 12/14 胆沢城跡、奥州文化財センター、江釣子古墳群、北上市博物館
- 12/15 伊治城跡、入の沢遺跡、栗原市役所築館総合支所出土文化センター、宮沢遺跡、東山官衛遺跡群、山畑横穴墓・ふるさと研修センター展示室
- 12/16 雷電山古墳、飯野坂古墳群(薬師堂古墳・宮山古墳・山居古墳・山居北古墳・観音塚古墳)、郡山遺跡、遠見塚遺跡、陸奥国分寺、多賀城碑・多賀城跡、東北歴史博物館



## ◇参加記

博士前期課程1年 谷口 とし

日本列島の東北地方における古代の様相をフィールドワークによって学ぶ機会として、12月6日から9日の4日間、東北プログラムが実施された。12月6日に岩手県の盛岡駅に到着し、そこから初日は岩手県、2日目以降は南下して宮城県にて様々な史跡をみてまわるといことが大まかな内容である。特に今回のプログラムの大きな目的は、古代東北に蝦夷政策の一環として多く築かれていた城柵を見ることにあった。実際には南から北へと城柵は設置されており本来はその通り見るべきだが、今回はあえて逆行して北から南へと城柵をたどっていった。歴史学・考古学を研究する我々にとって新しいものから古きものにたどっていくという方法は最終的にはそれらの場の意義を考えるにあたってとても重要な方法であったのではないかと私は考えている。

1日目に訪れた城柵は徳丹城と志波城である。両者に関しては、元々あった志波城を文室綿麻呂の建議によって移設した城柵が徳丹城である。徳丹城跡にある矢巾町歴史資料館では冑のような防具の遺物を見た。徳丹城跡自体にはいくつか柱痕が半明しており、政庁跡なども確認できた。志波城に関しては、我々が今回訪れた城柵の中で最も復元が行われている。特に堅穴建物の復元については、その建物が城柵に所属する鎮兵たちの兵舎建物であったと考えられ、このような復元が行われているのは私たちが今回見た中では志波城のみなのであった。

2日目に訪れた城柵は胆沢城である。胆沢城跡は坂上田村麻呂によって建設され長い間鎮守府として機能し、多くの兵士たちがそこに勤務していたことがわかっている。遺跡跡に関しては、城内の政庁跡が見受けられ政庁正殿などの場所が示されていました。胆沢城において私が注目したのは兵士歴名簿である。これは胆沢城にて出土した漆紙文書であり、兵士の「名前・年齢・郷名・戸番・戸主名・戸口」が記載され、城の役人がそれを確認した跡が見受けられる。このような文書が出土したのは東北城柵において胆沢城のみである。この史料は東北の鎮守府にどのような兵士がいたのかを示す有効な史料であり軍事研究において重要な史料と考えられる。

3日目に訪れた城柵は伊治城である。伊治城は伊治皆麻呂の乱が起きたことで東北軍事史において重要な城柵である。伊治城に関し



て、私が最も注目したのが弩の模型である。伊治城においては弩が発掘されたとされており、今回はその模型の写真を見た。弩に関しては、実際に国史に残っている史料は少なく、蝦夷関係の史料においては国史上いつ弩が使われていたのかということとは不明確であった。しかし、伊治城において実際に弩が発掘されるということは弩が使用されていたという証明になる。この点で、改めて文献史学と考古学の相互を関連付けるという意義を感じることができた。

4日目に訪れた城柵は多賀城である。多賀城は陸奥国府や鎮守府が置かれたことで東北における政治の中心地ともいえる城柵である。城柵の遺構残存状況に関しては、柱跡などが明確にわかるというのが限界である。しかし、そのような中多賀城に関しては具体的な門の跡や礎石などを実際に見ることができ、残存状況に関しては今回訪れた城柵の中で最も残りの良い遺跡であると考えられる。多賀城において特に印象に残っているのは南大路跡である。南大路跡は多賀城遺跡において外郭南門から政庁にまでつながる道路の事ではあるが、このような大路は他の城柵で見ることができない。それぞれの城柵で広大な敷地を以って城柵となしていたことは言わずもがなであるが、このような大路の存在は多賀城の敷地の大きさが他の城柵と比較して広いものであり、それが多賀城と他の城柵の差異として多賀城の東北地域における重要性がうかがえた。

城柵の他にも今回のプログラムにおいては、柳の御所遺跡や中尊寺金色堂といった中世史との関連性も垣間見える場所や山根横穴墓や雷電山古墳といった考古学の遺跡も実際に見て回った。私は古代史特に律令制下の時代に特出しているため、中世との関連性もある平安時代や古墳などの考古学といった分野に関してはあまり触れたことが無かった。そんな私にとって、今回のプログラムは普段目にする事のない場所に実際に訪れたことはより今後の自分の知識を深めていくよい機会となった。末筆ではあるが、この度、このような機会を与えてくださった先生方、関係者の方々に感謝を申し上げます。



## ◇南カリフォルニア大学プログラム

実施日：2017年2月15日～20日（4泊6日）

参加人数：院生4人、引率教員4人（本学：2人、島根大：1人、東博：1人）

実施場所：南カリフォルニア大学

〈USCプログラム・フィールドワーク概要〉

2月15日 成田空港発、ロサンゼルス空港着

2月16日、17日 USCにおいて学術交流

2月18日 ゲッティ・ヴィラ見学

2月19日 ロサンゼルス空港発

2月20日 成田空港着



## ◇参加記

博士後期課程3年 桜田真理絵

2月15日～20日の日程で、今年度の南カリフォルニア大学プログラムが開催された。同プログラムは、明治大学と南カリフォルニア大学とのあいだで毎年実施されている学術交流である。日本からは、考古学・日本史学・日本文学の院生4名、教員4名が参加した。2月15日夕方に日本を出発し、現地時間15日午前ロサンゼルス空港に到着、翌16日と17日に学術交流、18日に美術館見学、19日午前ロサンゼルス空港を出発し、日本時間20日夕方に日本に到着した。

16日、17日に開催された学術交流では、日本からの参加者8名、アメリカの参加者7名がそれぞれ研究報告をおこなった。報告の内容は、考古学・日本史学・日本文学と多岐に渡り、時代幅も弥生時代から明治時代まで幅広い内容となった。

私は、「律令制以前の天皇后妃について」（日本古代史）というタイトルで報告をおこなった。報告の概要を示すと次のようになる。律令制以前の后妃について通説では、嫡妻・大后とそれを支える制度が存在したとみなしてきた。しかし、その根拠である史料用語「オホキサキ」「大后」を検討してみると、それぞれ嫡妻を示す語句ではないことが明らかとなった。そのことから、律令制以前の天皇后妃については、大后制というフィルターを除いた研究が求められる。以上が報告の概要である。報告の際、パワーポイントに英語の説明文も表示するなどの工夫をしたが、学術用語の英訳に非常に戸惑った。例えば、「天皇」について今回は「Emperor」を使用した。律令制以前の天皇は本当に「Emperor」か。「嫡妻」という言葉を「Official wife」としたが、そもそも日本語の「嫡妻」は「正妻」と違うのか、同じ意味で訳してよいのか。英語での意味のみならず、普段あまり意識せず使用している日本語の学術用語についても本当に適当であるのかという点で非常に難しかった。報告に対しては、

検討には用いなかった『古事記』『万葉集』の「大后」の意味や、「天皇」号の使用開始をどの時期ととらえるか、「オホ」「大」という語句の意味をどのように考えるか、といった質問・意見をいただいた。

「天皇」号使用開始以前には、「大王」という言葉が使用されていたとされるが、「大王」もまた「大」を冠す言葉である。「大」「オホ」の使用方法を検討することで、「大王」「大后」という言葉の意味や使用方法などをより深く明らかにすることができるかもしれないと感じた。今後、使用する史料の幅を広げて、「大后」という言葉の意味を明らかにしたい。

英訳・日本語訳についての問題は、他の報告からも考えさせられた。アメリカの研究者は、『続日本紀』や「御成敗式目」などの史料を書き下し・現代語訳・英訳していた。漢文の正確な現代語訳は難しく、普段ニュアンスで説明してしまうことも多い。しかし、英訳ともなれば一語ごとの正確な意味の読解・解釈が必要になると思う。それを論文で使用するすべての史料に対しておこなっていることに驚愕した。そして自分自身の史料読解の甘さを痛感させられた。





また、アメリカの研究における視野の広さにも驚いた。例えば、古代の氏姓制の報告に対しても近世の古文書における名前の書き方について質疑が及んだ。対し近世の相撲に関する報告では、埴輪や古代の相撲節会に話が及んだ。日本においては、古代なら古代、中世なら中世と時代ごとに完結してしまう研究が多いように思う。私自身も古代、恥ずかしながらその中でも専門とする飛鳥・奈良時代以外の研究状況は詳しくない。しかし、通史的な視野を持つことで見えてくる視点・観点があること、そして自分自身の視野の狭さというものを感じた。今回の研究会で、古代なら古代だけ、日本史だから日本からだけ見ていけばいいのではなく、広い視野から多くの視点から歴史を研究することの重要性を知ることができたと思う。今回得ることができた知見をこれからの研究に生かしたいと思う。

18日にはゲッティ・ヴィラ美術館を見学した。資産家ポール・ゲッティによって収集された様々な美術品、とりわけ彫刻作品を多く収集した美術館であるゲッティ・ヴィラは、建物・中庭などの外観も美しく、古代ローマ、ギリシャなどの国の美術品を間近で見学することができた。日本の博物館ではあまりみられないような体験型展示もあり、展示を見るだけではない楽しみもあり、有意義な見学となった。

今回のプログラムでは、アメリカにおける最先端の日本研究を知ることができ、その水準の高さと視野の広さにとても驚いた。繰り返しになるが、日本史研究だからといって日本からだけ見ていては開けない視野があることを痛感した。この経験を大切に、今後幅広く研究をおこないたいと思う。また、機会があれば自分の研究を英語で報告することができたら、自分自身にとっても理解が深まるのではないかと思った。

最後に、今回のプログラムに参加させて下さった先生方、南カリフォルニア大学の皆さん、一緒に参加した院生の皆さん、プログラムに関わったすべての方へお礼を申し上げ、結びとしたい。



## ◆国際学術研究会

### 「交響する古代Ⅶ—古代文化資源の国際化とその意義VOL.2」

日時：2017年1月13日（金）

1月14日（土）

場所：明治大学グローバルフロント・グローバルホール

#### ◇報告者と報告タイトル

1月13日	関 恭平	明治大学大学院生	『源氏物語』蜻蛉卷薫独詠歌について—「荻の葉に露ふきむすぶ秋風」を起点として—
	Jillian Bandt	U S C	大学寮と勸学院：平安時代の教育を中心に
	桜田 真理恵	明治大学大学院生	女帝「不婚」と「未婚」のあいだ
	坂口 彩夏	明治大学大学院生	皇位継承法の変化と臨朝称制—持統天皇の即位・譲位前史—
	及川 穰（島根大）・佐々木憲一	（明治大）	資料学的アプローチによる北米の在外考古資料の資源化：近代化過程の分析と超克
	牧野 淳司	明治大	源氏物語表白の文化史的研究
	Karl Friday	明治大	武士研究の研究史のなかでの日本と外国の相互作用
	鄭 雨峰	高麗大学校	箴言集『呻吟語』の東アジアの伝播と受容について
	中村 成里	明治大	『栄花物語』巻二五の検討—後伏見天皇筆栄花物語切を端緒として—
	植田 麦	明治大	『古事記』における名と称の表現—大物主神を中心に—
1月14日	小口 雅史	法政大学	在欧敦煌吐魯番文書の調査成果とその文化資源化
	久米 雅雄	大阪芸術大学 寧楽美術館	アジア印章史の研究と方法論と印章文化資源の国際化—寧楽美術館所蔵古璽印等の 印学的研究と海外での公表と刊行—
	Janet R. Goodwin	U S C	近代以前日本史研究における共同研究と協力関係
	鈴木 卓治	歴博研究部	正倉院文書歴博複製資料の自在閲覧システムの開発とその展開
	加藤 友康	明治大	日本古代における文書整理の営為
	吉村 武彦	明治大	大宝令の復元と『令集解』『日本書紀』データベース—大宝田令の復元を通じて—
	石川 日出志	明治大	二つの金印—「漢委奴國王」と「親魏倭王」

## ◇参加記

博士後期課程二年 関 恭平

国際学術研究会交響する古代VIIは二〇一七年一月一三日、一四日の二日間にわたって開催された。シンポジウム全体を通してのテーマは「古代文化資源の国際化とその意義」であり、この問題意識のもと、多くの先生方の発表がなされた。今回のシンポジウムにおいては、文学、歴史、考古に関する研究だけではなく、在外資料、共同研究の様相、資料の閲覧システムの構築等に関する研究発表もなされ、シンポジウムの内容は多岐にわたった。様々な分野の研究が横断的に集積された交響する古代VIIであるが、以下今回のシンポジウムを通じて得られた所感の一つである、資料の可能性を拡大することの重要性について触れていきたい。

研究者によって興味関心は異なり、対象へのアプローチの仕方、方法論も相違する。一つの研究対象であっても、種々の着眼点、様々な方法、多様な視座をもって研究がなされ、そこから多くの意味が見いだされていく。このような研究方法の差異は、国や地域を跨ぐことにより、さらに大きなものになっていく場合もある。その結果、ある地域・国においてその価値が充分見いだされていない資料が、他の地域・国の研究者のもとで調査されることにより重要な価値が見出される例もときには生じる。地域や国



を越えていくこと、つまりその対象が国際化する、ということは、一つの事物に対する研究方法

の多様化へとつながり、その資料の可能性の飛躍的な拡大につながるものといえる。

地域や国を跨ぐことによる資料価値の高まりは、複数の国の歴史と結びつく歴史資料において



は、なおのこと顕著なものとなってゆく。様々な歴史的意義を内包する史料は、多様な歴史、または歴史観のもと調査分析されることによって、その価値が十分に発揮されていく。そうであるならば、文化資源を一所に留めて置くことは、その価値を狭めることにつながりかねない。多くの資史料はより多くの研究者の目に触れる機会を必要としており、より多くの方法、価値観、考えや文化のもとで捉えられることを求めている。「古代文化資源の国際化」はそうした要求に応えるものだと考えられる。

このような、文化資源の国際化、という事柄とともに、資史料の閲覧の自由化の推進も見逃すことはできない。より簡易、簡便に閲覧することが可能になれば、たくさんの研究者の目にとどまり、資史料がより積極的に活用されていくだろう。そしてこのことも、文化資源の価値を高めることへと結びついていく。

古代から文書等の諸資料は様々に整理され、利用され、継承されてきた。そのような資料の扱われてきた歴史の中で、「古代文化資源の国際化」は、その資料の可能性を飛躍的に高め、そのことは多くの事象の解明の糸口となってゆく。以上のことがこのシンポジウムに携わり、先生方のご発表を拝聴することにより得られた所感である。

## ◇2016年度プログラム（後期）の軌跡

2016/10/27～10/31 中国プログラム（4泊5日）

2016/12/13～12/17 東北日本プログラム（4泊5日）

2017/1/8～1/9 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学研究交流プログラム

2017/1/13～1/14 国際学術研究会「交響する古代VII—古代文化資源の国際化とその意義—」開催

2017/2/15～2/20 USCプログラム（5泊6日）

明治大学 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

日本古代学教育・研究センター：猿樂町第二校舎3階 TEL:03-3296-4492

E-MAIL jkodaken@meiji.ac.jp ホームページ [http://www.meiji.ac.jp/dai\\_in/arts-letters/jkodaken](http://www.meiji.ac.jp/dai_in/arts-letters/jkodaken)